

不要な人なんていない

三戸呂 克美

今年も暑い夏がやってきました。梅雨もいつ明けたのかわからず過ごしていました。今年の梅雨は雨が少ないな、と思っていたのは私の居る地域だけで、日本列島では局地的に大雨に降られて大被害の出ている地域があり、亡くなられた方、被害に遭われた方に、お悔やみとお見舞いを申し上げます。

さて、多くの皆さんは蟬(セミ)取りをした経験や思い出があると思います。止まっている木を見つけてソー！と近くに行き網をかけたとき逃げられ、その時オシッコ(?)をかけられた、といったことなど、色々な事を思い出します。しかし、今蟬取りをしている子どもたちを見かけません。この現象は私の住んでいる地域だけでしょうか。また、蟬取りをしなくなったせいか蟬が地面に落ちているのです。子どもの頃なら夏休みの宿題として“セミ拾い”なんて事ができたかもしれません。

それでは本題に入りましょう。蟻(アリ)の話をご存じでしょうか。蟻の研究をしている北海道大学大学院農学研究院の長谷川英祐准教授によると、蟻のコロニー(巣)の中には働きモノの蟻と怠けモノの蟻がいて、怠けモノ蟻の割合は常に2~3割になっているそうです。長い列を作り必要なものを運んでいるあの列の中にも2割のありは働いていないそうです。興味深いのは、働きモノ蟻だけを取り出してコロニー(巣)をつくったところ、そのうちの2割が怠けモノ蟻になるということ。働きモノ蟻が怠けモノ蟻に変化するのです。それは、なぜか?研究によれば、2割の怠けモノ蟻がいる理由、それは蟻のコロニーの場合、外敵(蟻の天敵)から攻撃を受けた時に緊急対応できるよう温存しているというのです。怠けモノ蟻はいわば「予備要員」というわけです。稼働していないように見えて、スタンバイOKなのです。蟻の世界では、働きモノ蟻にも怠けモノ蟻にも肯定的な生存意図があるのです。これは、蟻という個体が持つ“性格”というより、集団組織の力学的な面があるようです。

我々人間の世界でも同じ事が言えるのではないのでしょうか。企業などでは「2:6:2の法則」といわれているものがあります。ご存じの方も多いでしょうが、全体のトップ2割がとても働きモノで優秀、中間の6割が普通、下位2割はやる気が低下して成果を出さない、という構造が見られるといわれます。人間組織にも集団の力学として、「下位2割」に蟻と同じような肯定的な生存意図があるかどうかは分かりません。ただ、少なくとも下位2割の力は、「外的要因」によって大きく変化するのは蟻だけではなく、人間も同じではないのでしょうか。

我々も頸損連絡会という一つの組織を作っています。個人では成しえないことも集団となればお互いの力を結集して成しえる事が出来るのです。そんな中で不要な人は誰一人いません。

(ネットニュースより引用)

もくじ

特集『今、生活の中で問題と感じていること』

	(米田、土田、島本卓、伊藤靖、橘、大野、山本)	2
行事報告「しあわせの村宿泊体験合宿」	(米田、W. K、K. T、K. A)	17
活動報告「神戸リカバリー研究会シンポジウム」	(三戸呂克美)	20
活動報告「全国頸髄損傷者連絡会 四国大会」	(土田、橘)	21
会員報告「2017 食博覧会・大阪」	(坂上正司)	24
連載「白内障③」	(三戸呂克美)	25
連載「自立生活はじめました」	(山本智章)	26
連載「Road to Paralympic」	(坂上正司)	27
会員紹介「近況報告」	(I. Y)	30
行事のお知らせ		32
入会案内		34